

『澤瀉集』 (澤瀉集)

周作人著 中島長文訳



出典元：毎日頭條 <https://kknews.cc/culture/qj2k5rr.html>

【北新書局版表紙】

周作人文集翻訳叢刊序

周作人が書いた書物に関する文章は、先に出した『周作人読書雑記』全5巻（平凡社東洋文庫）にだいたい訳したが、彼の著作は翻訳の他は大抵が書物に関わらないものはないので、漏れたものも多い。これはそれを補おうというのではないが、補う分も含めて周作人が出版した最初の形にして日本の読者に読んでもらおうとしたものである。というのはやはり書物という視点からだけでは、彼が民国期の文化において果たした役割というか、彼の全体像が見えにくい。その全体をつかむためには、やはり彼の著作をそのまま提示するのが一番だろう。周作人の著作は1980年代の半ばに解禁され、1998年にはテーマ別編集の『周作人文類編』（湖南文芸出版社・全10冊）が編まれ、2009年4月には編年体の、索引も含めた『周作人散文全集』全15巻が広西師範大学出版社から出て、日記や手紙を除いた現存するほとんどの文章が読めるようになった。そういうわけで読書環境が整備され、中国では一時に爆発的なブームを引き起こし、今では少し落ち着いているようだが、近代作家としての認知は回復したように見える。極めて優秀な才能と文学的感覚を持ちながらほとんど日本の中国侵略によって潰されたと言ってよいこの作家の作品を、少しでも日本人に読んでもらいたいと思う。中国での動向に促されてか、日本でも次第に周作人に興味を持つ人は増えてきている。しかし研究者など原文が読める人はよいが、読めない人にとっては依然蚊帳の外である。この翻訳は自分で周作人を読むと同時に、元々そうした人々に読んでもらえば、周作人という民国時代の文人がその時代にどういうことを言っていたのかを知り、読者自身が自分で論を立てるにしろ、彼をめぐる議論に参加するにしろ、一応基礎的な資料としての役割を果たせるのではないかと思ったのである。もっとも専門家の議論にしたところで、この人本当に読めているのかというようなところはなきにしもあらずで、難しいところはある。しかしそんなところはよくわからないと言えば済むことで、それよりもっと難しいのは、小品文の名手と言われた彼の文章の文学的香気とも言うべきものを訳出できているかである。それはこの際あっさり目と目を瞑ってもらい、のちの文才ある人の翻訳を待ってもらうしかない。ただ散文は詩とちがって意味の繋がりがまだ比較的取りやすい。それを頼りにだいたいところが掴めるようにと心がけた。

翻訳に際してのもう一つの難題は、彼の文中に引用せられた外国語の文章をどうするかという問題である。抄文公、つまり引用魔とでも言おうか、と称せられた周作人の文章には、様々な書物からの引用が山盛りである。ただ日本の読者ということを考えれば、ギリシア語や英語からの引用は、周作人の翻訳をそのまま重訳するしかない。問題は引用されたのが日本文の場合である。たとえば『徒然草』や芭蕉の紀行文など、日本人によく知られた文の引用を、周作人がいくらか中国語に置き換えていたにしろ、そこからの重訳では気が抜けてしまい、日本の読者にはかえって奇異な感じを与えるだろう。特に原文が詩歌になるとそれが突出してくる。わたしが試みた中国語訳された俳句や川柳からの復元では、たった一句「蝙蝠や人買船の岸による」がまぐれ当たりで戻っただけで、川柳の「お前たち何を笑うか爺様の屁」は残念ながら「爺様」は原文では「隠居」であった。短詩は言葉がイメージだけで繋がるのでまぐれもあり得るのだ

が、短歌になるともうダメである。それで日本の読者には引用の原文をできるだけ持ってくる方が、その文章を周作人がどういう文脈の中でどのように引いているのかが分かりやすいだろう。そう考えて先に出した『周作人読書雑記』では努めてそうした。しかし周作人が前にした原文の光景がどういうものであったかはそれでよく分かるが、彼がそれをどのように取ったか、どのように理解したか、どのように解釈したかは、また別問題で、それを見るためには引用部分の翻訳（中国語）を文章全体の文脈と主旨との関連からできるだけ正確に重訳して、必要なときには注釈をつけるより他に手はない。本来的には翻訳である以上そうするのが真つ当であると思う。ただここに訳した文章では、あるものは原文を引いたり、あるものは重訳したりして、二つの間を揺れ動いていて一定していない。どちらかに決めた方がよいのか、それもまだ決めかねているのである。この問題は他の外国語の場合でもたぶん同じことだろう。それぞれの言語に堪能な人が詳しい注釈をつけてくれることを待っている。

なお読んでもらえばわかることだが、文集ごとの翻訳とは言い条、『読書雑記』に所収のものは巻数を指示してあるのでそちらをご覧ください。また戦後の翻訳では、周作人の日本関係の文章を集めた木山英雄さんの『日本談義集』（平凡社・東洋文庫 2002 年 3 月）が拙訳よりはるかに優れているので、そこに収録された文章は凡て木山さんの訳におんぶすることにして、目次にその旨を示した。

以上はいわゆる能書きをまとめた前口上である。実のところ『颯風』の広告にも載せたように、教師をしていた頃から教室で読んだりして、訳し貯めたものがますますの分量になっているので、ゆっくり注をつけて訳文も吟味してそのうち公表できるようにしておこうと考えていた。ところが気がついてみると、自分にはそれだけの時間が残っているのかどうかさえ怪しくなってきた。そこで老後の仕事はとりあえず放っておいて、今ある分を『颯風』の資料庫に入れてもらって、興味のある人に読んでもらうことにした、というのがほんとうである。その作業の最中、戦後初めて周作人の民俗学的な方面の仕事に本格的なメスを入れられ、中国民話学とでもいべき分野を開拓された飯倉照平さんの訃報が伝えられた。はるかに敬意を払っていた飯倉さんはわたしより先輩だが、そのことでもいよいよ自分の持ち時間を意識することになった。

むかし人の文章を読んで、これはなんだろうと思うところに注が振ってあって、さてどうだと注を見れば「未詳」とくる、それを見てもどかしい思いをしたものだが、注をつける立場に立って見て、ああこれはこういうことなのだろうと思うようになった。つまり論者や訳者にも解らないから、このことについては知識や見聞もなく解りませんので、ご存知の方がありましたらどうぞお教を賜りますようにという信号なのではないか、と。これらの翻訳にはそういうつもりで「未詳」をつけたので、一体どれだけの「未詳」がつくのか数えたことはないので分からないが、お気付きの方がおいででしたらどうかご教示を吝しまれませんように。そして「未詳」のみならず、本訳文の誤訳や欠陥などのご指摘もお願いしたい。

予告には夏休みまでに追い追い公開したいと書いたが、読み返しに思いの外時間がかかって、夏休みはとっくに終わってしまった。今後もこの調子でいくとかなり時間がかかりそうだ。食言をお詫びするとともに、そのことも予め白状しておく。

なお表紙の写真については主に佐原陽子さんの助力を得、オンライン上の様式・構成の作成は高井美香さんに依頼した。お二人の協力に感謝する。

2019年9月15日、五四運動百周年に際してかろうじてその糸を繋いだ香港の抗議運動の行く末を案じて。

周作人文集翻訳叢刊凡例

- 一、翻訳の底本は原刊本ないしその影印本とした。正確には初出誌から直接訳したものもあるが、整理の過程で一通りは原刊本と対校した。
他に岳麓書社版周作人各文集・河北教育出版社版『周作人自編文集』・『周作人文類編』・『周作人散文全集』等を適宜参照した。
- 二、各文章の末尾にその初出誌を示した。
- 三、『周作人読書雑記』（平凡社・東洋文庫）全5冊に既収の文章は収録せず、目次にその巻号を示した。木山英雄氏訳『日本談義集』（平凡社・東洋文庫）所収の文章は収録せず、同様にそのことを示した。
○○→『読書雑記』第○巻
○○→『日本談義集』
- 四、先行する文集にすでに収録済みであるものは、上記と同様に当該の文集には収録せず、先行する文集名を示した。例えば、『談龍集』所載の「日本の諷刺詩」はすでに『自分の畑』に収録されているので、次のように示した。
「日本の諷刺詩」→『自分の畑』
- 五、注釈は精粗一定しない。本文中〔 〕の中は訳者の注である。
- 六、注釈に用いた写真版はほとんどが Internet Archive からの借用である。これには大いに感謝の意を表す。

『澤瀉集』（澤瀉集） 版本及び目次

上海北新書局 1927 年 9 月排印初版
香港滙文閣書店據北新書局 1928 年 7 月再版影印
岳麓書社據北新書局初版 1987 年 7 月排印
河北教育出版社據北新書局初版 2002 年 1 月排印

目次中、文章のタイトルの日本語訳の後に括弧に入れたのは原文の篇題で、日本語訳と同じになるものは省いた。

序	(8)
蠅（蒼蠅）→『雨の日の書』	
『鏡花縁』→『周作人読書雑記』第5巻	
『雨の日の書』序→『雨の日の書』	
『陶庵夢憶』序	(9)
故郷の野草（故郷的野菜）→『雨の日の書』	
北京の茶菓子（北京的茶食）→『雨の日の書』	
茶を飲む（喫茶）→『雨の日の書』	
酒を語る（談酒）	(11)
黒篷船（烏篷船）	(14)
雨に苦しむ（苦雨）→『雨の日の書』	
エロシエンコ君（愛羅先珂君）→晨報社版『自分の畑』 「愛羅先珂君を送る」 「愛羅先珂君を懐 う」 「再び愛羅先珂君を送る」	
死の黙想（死之黙想）→『雨の日の書』	
弔辞（唁辭）→『雨の日の書』	
死ぬ法（死法）	(16)
心中	(19)
三月十八日の死者について（關於三月十八日的死者）	(23)
新中国の女性（新中國的女子）	(25)
ぶつかって怪我をする（碰傷）	(29)
烈士を食う（喫烈士）	(31)
閑話四条（閑話四則）	(33)
鉄砲の趣味（鋼槍趣味）	(36)

『澤瀉集』序

ここ何年かわたしはやっと文章を書くことを学んだ。しかし成績は芳しくない。出身が貧しく、幼時にしっかり勉強しなかったし、後になって学んだ本業も又文学とは完全に縁がなかったから、何か批評の文章を書こうと思っても、身分不相応であるばかりか、実際甲斐ないことでもあった。この自覚は間もなく身につき、近頃書くものはただ感想の小篇でしかないが、わたし自身の一部分を表現できていれば、それでもう満足であり、載道や伝法の考えは全くない。友人が、こうした思いつくままに書いた文章の中ではどういふものが最も上出来なのかと訊いたが、わたしは答えられないのを恥じた。しかし一転して考えると、よいとは言えないまでも、自分でも比較的気に入っていて、少しはその時の感情思想と興味を表現できていると思うものは、やはり三、四篇はあって、いまそれを集めて、苦雨齋叢書の一とする。ゴールドバーグ (Isaac Goldberg) がエリス (Havelock Ellis) を批評して、彼の中には一人の叛徒と一人の隠士がいると言ったが、これは言い得て最も妙である。決してわたしはエリスを引いて自らを重く見せようというのではない。わたしの趣味の文にもまだ叛徒が生きていることを願う。わたしは毫も躊躇することなくこの小冊子を同じ様に中国現代の叛徒と隠士たちの前に薦める。

書名の澤瀉についても、別に深い意味はない、——必ずしも『楚辞』の「澤瀉を筐^かれるに豹の鞞^{かむぶくろ}を以てす」*の意を用いたわけではなく、ただこの小さな草が好きだから書名に使っただけに過ぎない。日本の「紋章」の中に澤瀉があるので、いまその図案を借用して巻首に置いた。民国十六年八月七日、北京にて。

※初出：1927年8月20日『語絲』第145期

*『楚辞』「九嘆」の「怨思」の句。王逸の注によれば、澤瀉の様な悪草を豹の革で作った革袋に満たしたところ何の役にも立たないということを言うとする。

『陶庵夢憶』序

平伯が『陶庵夢憶』*を重刊しようとして、わたしに序を書かせた。わたしが以前は越の人間であったからである。

光緒二十三年（一八九七年）祖父が事件で杭州府の獄に繋がれ、わたしは宋姨太太〔祖父の妾〕について花牌楼に住み、二、三日ごとに一度彼を見舞いに行った。そこで初めて『夢憶』を見た。「硯雲甲編」本で、その中には他に『長物志』や『槎上老舌』があつてやはりその時わたしが喜んだ書である。張宗子の著作は多いようだが、『夢憶』以外にわたしは『於越三不朽図贊』、『瑯嬛文集』、『西湖夢尋』の三種を読んだだけで、彼が選んだ一卷の『冰雪文』はかつて大路の古本屋で見たことがあるが、吹っかけられた値段があまりに高かったので買うことができなかつた。わたしは『夢憶』が一番良いと思う。『文集』の中にもいい文章はあり、『夢憶』の「泰山を紀す」などはほとんど『岱志』の節本であるし、人物を書いた何篇かも「五異人伝」と似たところが多いけれども、『三不朽』は彼の遺民の気の具体的な表れであり、姚長子などいくつかの画像はいささか疑わしいところがあるが、他の大人物にはおそらく多く基づくところがあるのだろう。王謔庵の像を見たがこれは捏造できないと思う。というのはそれにはとても個性があるからである。

『夢憶』は大抵がどれも面白い。「現在」については、だれもがたいい満足せず、しかもこの身は現在という情景の中にあつて、要するにいささかぼやけていて、玩味の暇がない、だから人は多く現世から逃げる傾向があり、ただ夢想あるいは回想だけが最も甘美な世界だと思ふのである。ユートピアを説く者はなんでも願いの叶う白昼夢を見ているのである。老年の人間は若い頃の生活を思い出し愉快に、いや、昨夜のことで今日よりは面白いと思ふのである。これは必ずしも保守か何かによるものではなく、実はそうした過去がようやく我々のゆっくりした摩挲賞翫に耐えるようになったので、たとい一二筆加減したところで、大したことはないのである。遺民の感歎もこの類に属するが、それがもう少し深切であつて、白髪の宮人が天宝の遺事を説くのととはまた少し違う。あるいはちょうど寡婦の追懐に比せられるだろう。『夢憶』はそうした文章のよいものであり、追懐されるのが又明朝の事であるから、さらにわたしには面白いのである。わたしは決して民族革命思想の影響で、特に明朝になにかよしみがあるわけではなく、実を言うと、ただ清朝が信用ならないだけである——辮髪を一本背中に垂らして何が風雅なものか。ちょうど纏足の女人を美人だとは信じないように。

『夢憶』が記しているのは多くが江南の風物であり、紹興の事もその一部分を占めているが、それは又わたしの知っていることとは何とも違う別の紹興である。会稽は禹域だと言うけれども、結局はやはり辺鄙な小郡であり、終には小家の子の相を免れない。大禹の陵墓、平水、蔡中郎の柯亭、王右軍の戒珠寺、蘭亭など、名勝地について述べたのはもともと少なくない。この他に普通の山や川でも、どこでも気の向くままに遊山して、いささかの佳趣を得ることができる。もしあなたが適当な遊び方を心得ているならば。だが張宗子は都会の詩人であり、彼が注意するのは人事であつて天然ではない。山水は彼が書く生活の背景でしかない。この点を言うと、わたしは

『夢憶』の一二条を思い出す。紹興にとっては実に今昔の感に耐えない。明朝の人はたとい別に取るに足るところがなくても、彼らの狂は少なくとも要するに敬服に値する。こうした狂は今となっては欠片も残っていない。いつからか知らないが、紹興の風水が変わったせいだろうか、当地が出す人材はほとんど師爺と両替屋の番頭の二種に限られ、もっぱら苛酷精細のやり手で売り出し、彼の豪放な気象はすでに全く消えてしまい、天下を駆け回って『水滸伝』の人物を探そうなどというあの気魄はもう誰も理解するものがないし、実行ときてはさらに言うまでもない。彼らは確かにすでに明朝の放蕩息子ではなく、田舎の土着の金持ちに変わったのである。これが結局福なのか禍なのか分からない！「城郭は故の如きも人民は非なり」、『夢憶』を読んだ後思わず仙人丁令威のこの詩を思い出した。

張宗子の文章は随分と趣味がある。これもわたしが『夢憶』を好きな一つの理由である。わたしはいつもこう思う。現代の散文は新文学の中で外国の影響を受けること最も少ない。これは文学革命と言うより文芸復興の産物と言ったほうがよい。文学発展の途上では復興と革命は同じように進展ではあるけれども。理学と古文とが全盛でなかった時に、抒情的な散文はすでに相当の発展を遂げていたが、学士大夫の眼中には自ずとそれほど重視されなかった。我々が明清の名士派の文章を読むと、現代文の情趣とほとんど一致するように思う。思想的にはもちろん若干の距離があるのは免れ難いけれども。だが明人が表す礼法に対する反動はなかなか現代の息づかいを持っている。張宗子は大家の子弟であり、『明遺民伝』は彼を「衣冠揖讓、綽として旧人の風軌あり」と称し、人のご機嫌を伺う山人ではなかった。彼の洒脱な文章は大抵性情の流露に出るもので、読んでも嫌にならない。『夢憶』は彼の文集の選集と言え、わざと使った怪文句の他は、何篇かは本当に不壊不朽に書かれていると思う。もしわたし自身が一二篇でも書けるなら、もう十分に満足である。だがこれは羨みもできないし、真似もできない。

平伯が『陶庵夢憶』を重刊しようとするのは、おおいに賛成である。今回は決してわたしが以前越の人間であったからではなく、『夢憶』がわたしの好きな書物であるからである。

民国十五年十一月五日、京兆宛平にて。

※初出：1926年12月18日『語絲』第110期

* 『陶庵夢憶』 松枝茂夫訳岩波文庫本がある。

酒を語る

このご時世、酒を飲むのはとても面白い。わたしは京兆の人間だけれども、南海の海辺で成長した。そこは酒の産地で有名な所だ。わたしの母方の伯父と父方の叔母の夫の家はいつも自家用の酒を何甕か作っていたが、わたしは結局酒はどのようにして作るのかを知らずじまいであった。ただ使うのは多分もち米だったろう。というのはわらべ歌に、「老酒はもち米で作る、飲むとnionioになる」と言うからである——最後の一字は当地で豚を言う俗語である。酒造りの方法と器具はどれも簡単なようである。ただ煮る時の手法がなかなか容易ではなく、経験のある職人でないとダメで、ふだん酒を造る家では大抵一人、俗に「酒頭工」という人に来てもらう。「酒頭工」は自分では酒が飲めない人が最上で、その人に専ら酒を煮る時機の鑑定を受け持ってもらう。遠い親戚に、われわれが「七斤公公」と呼ぶ人がいた、——彼はわたしの母方の伯父の叔父であったが、伯父の家で臨時雇いをしていたので、伯父の奥さんは彼を「七斤老」とよんだ。ときには「老七斤」と呼ぶのも聞いた。彼はそうした酒頭工で、毎年人が酒を造るのを手伝いに行った。彼はタバコが好きで、冗談を言い、麻雀をやったが、あまり酒は飲まなかった（海辺の人は一二碗飲むくらいでは飲める内には入らない、市価で計算しても十文にもならない酒である。）だから商売は繁盛し、いつも一二百里もある諸暨や剩県まで呼ばれて行った。彼の話ではこれは実は決して難しくはない、ただ甕の近くに行って屈んで聴けばよい、中で泡が立つ音がぷちぷちする、カニが泡を吹くような（子どもはカニが飯を炊くと言う）頃合いなら、それを煮るとよい、少し早いとまだ酒にならないし、遅いと酸っぱくなってしまふ、ということだ。しかしどうなるとちょうどよい時機なのか、他の人には相変わらずわからない。ただ聴き慣れた耳でないと断定できない、ちょうど骨董屋の目が古物を見分けるようなものだ。

みんなは酒を飲むのに大抵は猪口を使い、それで雅だと思っているが、実は正しくない。真つ当な飲み方は酒杯を使うのだ。浅くて大きく、底には高足がついている、古已に之有りのシャンパン・グラスである。普通には少なくとも二杯で、「串筒」一に当たる。値段は一杯六文のようである。串筒はちょっとひっくり返した凸の字に似ていて、上と下が一对三の比になっていて、ブリキで作り、蓋もなければ注ぎ口もないから、空けることはできるが注ぐことはできない。酒好きに言わせると酒は空けるのが正当で、注いだのはあまり旨くないという。ただ酒屋の手代は酒を量る前にまず串筒を「濯ぐ」（器の中に水を入れ、揺り動かして洗うことを言う）のをこのむが、濯いだ後往々にして水の一部が筒の中に残り、客は酒が薄くなるのを嫌い、よく言い争いになる。だから酒飲みの手練れは必ずまず給仕に串筒を濯がないよう言いふくめ、そして彼がきちんと量って爛をつける容器に置くのを監視する。上戸は多く竹葉青を求める。通称「本色」と言い、「元紅」は状元紅の略である。色を着けたものは、ただ素人が喜ぶだけである。他所の省にはいわゆる花雕というのがあるが、ただ当地の酒屋にはそんなものはない。伝えるところでは昔娘が生まれると、酒を醸して花雕（花模様のついた酒壺）に貯え、娘が嫁に行くときに客に振る舞ったのだと言う。しかしこの風は今ではもう存しない。娘を嫁に出すときにたまに花雕を使うことがあっても、そのときに元紅を買って代用にするだけで、飲む者は珍品としない。酒を

飲む人の中には家醸酒を備えており、そういうものには極上のものがある。毎年醇酒若干壘を作り、順番に庭に埋め置き、二十年後に掘り出せば、毎年二十年物の老酒が飲めるというわけである。こうした古酒は例として売りに出さない。だから買えるところがない。わたしはただ一度昔の先生の家でこうしたうまい酒を飲んだことがあるが、今以て忘れたことがない。

わたしは酒郷の生え抜きであり、しかも又こんなに酒を語るのが好きであるからには、さぞかし「三酉」と切れぬ縁の酒徒であるかのようである。だが実は大いに然にあらず。わたしの父はよく飲めた方であるが、彼がどれほど飲めたのかは知らない。ただ確か毎晩落花生や果物などを肴に、飲みかつよもやま話をし、少なくとも二時間はかけていたから、おそらく飲んだ酒は少なくはなかったろう。だがわたしは不肖で、いや、あるいは志はあるが及ばないと言えるかもしれない。というのはわたしは酒を飲むのは好きだが飲めない、だからいつも宴会になると、わたしはまず最初に酔って顔が赤くなる人間なのだ。辛酉〔1921〕に病気をしてから、医者にはわたしに酒を飲んで薬に代えるように言った。定量はブランディ毎回二十グラムで、ぶどう酒と老酒ならその倍である。六年以後酒量は少しも進歩せず、今でも百グラムの花雕を飲むと、たちまち関夫子になってしまう。（以前みんなは冗談で「赤化」と称したが、今は自ずと謹慎せねばなるまい、笑い話をするだけなのだ。）いくら飲んでも酔わない、飲めば飲むほど顔が白くなる友人がいるが、とても羨ましく思う。だが残念なことに彼らは飲めれば飲むほどに飲もうとしないのである。まるで美人が彼女の表情を頭にしようとしないうようなもので、実際そうあるべきことではない。

黄酒〔つまり老酒〕は比較的安いから、いつでも買って飲むことができると思っているが、他の酒だって悪くはない。白乾はわたしにはどうもきつすぎ、飲むといつも口に水ぶくれができやしないかと心配する。山西の汾酒と北京の蓮花白は少しなら飲めるけれども、やっぱりそれほど穏やかではない。日本の清酒はとても好きが、ただまるで新酒のようで、味がいまひとつ落ち着かない。ぶどう酒と橙皮酒はどちらも口に合うが、わたしが最もよいと思うのはやはりブランディである。西洋人はあまり茶の趣味を解しないように思うが、酒についてはなかなか年季が入っていて、決して中国に劣らない。毎日洋酒を飲むのは当然大きな底漏れの酒盃で、ちょうど葉巻を吸うようなものだ。しかし必ずしも国産品党に入り、齒を食いしばって淨糸*を吸う必要はなく、気ままにちょっとどんな酒であろうか飲んでみるのは構わない。少なくともわたし個人はそう思う。

酒を飲む趣味はどこにあるか。これはわたしにはおそらくはっきりとは言えないだろう。酒の楽しみは酔った後の陶然たる境界にあるという人がある。だがわたしにはこの境界がどんなものかあまりよく解らない。というのはわたしは飲み出して以来あまり陶然となったことがないようなのだ。どうしてだかわたしの酔いは大抵がただ生理的なもので、精神的な陶酔ではないからである。だからわたしに言わせれば、酒の趣味はただ飲む時だけにしかない。悦楽は大抵がやっているその刹那にあるのだと思う。もし陶然だというならそれも盃が口に当たるその時にあるはずだろう。酔って、眠くなれば、しばし休むべきだろうが、それも気持ちのよいものであるが、酒の本当の趣がここにあるとは必ずしも言えない。昏睡、夢魘、嚙言も、あるいは現世の憂患を忘

却する一つのやり方かもしれない。しかしこれにも限りがあつて、宇宙・生命を全て一口の美酒のうちに投げ込む耽溺の力がもっと強大なものには及ばない。わたしは酒を飲みながら、一方では「杞天の慮」をも抱いている。強硬な礼教の反動の後には頹廢の風気を引き起こし、その結果醇酒と婦人を借りて礼教の迫害を避け、サーニン(Sanin)の時代が出現するのは不可能ではないと深く恐れているのである。しかし、あるいは中国ではどんな運動も必ずしも徹底的に成功するわけではないし、青年の反撥力も必ずしもそれほど強くはないから、杞天は畢竟杞天にすぎず、相変わらずわれわれは非耽溺的な酒を飲むことができるかもしれない。もしそうなら、その時酒を飲むことは又きっと別の面白さを感じるのだろうか。民国十五年六月二十日、北京にて。

※初出：1926年6月28日『語絲』第85期

*浄糸 松枝訳『周作人隨筆集』（改造社）の注に「廣東産の水煙草」とある。

黒篷船

子榮君へ

お手紙受け取り、君がわたしの故郷に行こうとしていて、君に何か案内が欲しいとのこと承知いたしました。実を言うと、わたしの故郷、本当に懐かしく思う場所は、別にそこではありません。しかしそこで成長し、十年あまり過ごしたので、結局少しは情況がわかっていますから、この手紙を書いて君にお知らせします。

わたしがお知らせしようというのは、その風土人情ではありませんし、それは書きつくせません。しかし君がそこへ行かれてご覧になればわかることは、くたかく言うまでもありません。わたしが言おうとするのは面白い物についてであります。それは船です。君は家郷ではふだん人力車、電車、あるいは自動車に乗りますね。だがわたしの故郷ではそうしたものはどれもありません。城内あるいは山の上で駕籠を使う他には、ふつう歩くのに代わって皆船を使います。船には二種あって、ふつうはみな「黒篷船」です。白篷のは大抵が航船用で、夜航船に乗って西陵に行くのは特別の風趣があります。しかし君が乗るには要するに不便ですから、わたしも言わないでよいでしょう。黒篷船大きいのは「四明瓦」(Sy-menngo)で、小さいのは脚划船(划はuoaのように読む。〔足漕ぎ舟〕)で、亦小船とも称します。しかし最も適当なのはやはりその中間の「三道」、やはりつまり三明瓦です。篷は半円形で、竹片で編んで、中に竹の皮を挟み、上に黒いペンキを塗ってあります。両脇の「固定篷」の間に一枚日よけのを置いて、やはり半円で、木で格子を作り、一枚一枚小さい鱗型、径約一寸、すこぶる透明なのを嵌め込んであります、だいたいガラスに似て硬く耐用性があり、これを明瓦と言うのです。三明瓦とは、その中の船室に二枚、後方の船室に一枚の明瓦を持っているのを言います。船尾で櫓を使い、大抵は二丁、舳先には竹棹があって、それで船を止めます。船の先頭には眉目が書いてあり、虎のような様子ですが、微笑んでいるようでもあり、すこぶる滑稽で怖くはありません。ただ白篷船にはこれがありません。三枚の篷の高さはだいたい人が直立できるほどで、船室の広さは、四角いテーブルを一つ置き、四人が坐って麻雀ができます。——これは君はもうできることでしょう。小船はほんとうに一葉の偏舟で、船底のむしろに坐ると篷の天井は君の頭から二三寸離れているだけで、君の両手は左右の舷におけ、手を外に出すこともできます。こうした船ではまるで水面に坐っているようで、田んぼの岸に近づくときは泥土が目と鼻の先です。しかも風浪に遇うと、坐り方が少し不注意だと、たちまち船底を天に向けてひっくり返り、とても危険ですが、またすこぶる面白く、水郷の特色であります。でも君は乗らなくて構いません。最もよいのはやはり三道船に乗ることでしょう。

もし船で出かけるとすると、電車に乗るようにせっかちに、すぐ着くと思っはなりません。もし町を出て、三四十里の道のり(わたしたちの所の里は短く、一里は漸く一マイルの三分の一ほどです)を行くとすれば、行き帰りにどうしても一日は見ておかねばなりません。船では、遊山の態度をとるべきで、周りの風物景色、随所に見える山、岸边の櫓の木、川辺の蓼や田字草、魚舎、様々な橋を見て、眠くなったら船室で眠るか、随筆を取り出して読むとか、あるいは一杯

の緑茶を淹れて飲むとかするのです。偏門外の鑑湖一帯、賀家池、壺觴付近、わたしはいずれも好きです。あるいは婁公埠まで行って驢馬に乗って蘭亭に遊び、（だがわたしのお勧めはやはり歩行で、驢馬に乗るのは君にはふさわしくないかもしれません）暮色蒼然となる頃に城壁にオオイタビが絡まった東門に入るのは、すこぶる面白いことです。もし陸路が穏やかでないならば、杭州に行くには午後の出航がよろしい。黄昏時の景色はまさに最も見事です。ただ残念なのはそのあたりの場所の名前をみんな忘れてしまったことです。夜間船室に眠っていて、水音櫓の音、行き来の船の掛け合いの声、それに郷間の犬や鶏の鳴き声を聞くのも、とても面白い。一艘船を雇って田舎に宮芝居を見に行けば、中国の旧劇のほんとうの趣味が理解できます。それに船での行動は思いのまま、見たければ見るし、眠りたければ眠るし、酒を飲みたいければ飲む。わたしは理想的な行楽法だと思います。ただ残念なことは維新以来について言いますとこうした芝居と神迎の儀式が全部禁止になって、中産階級の低能人が別に「布業会館」などに「上海式」の芝居舞台を作り、みんなに券を買わせて上海の女芝居を見せることです。そんなところには決して行ってはなりません。——わたしの故郷に行かれても、誰もご存知の人はいないでしょう。わたしも又教師稼業ですからあなたのお供をして、夜行船に乗ったり、無駄話をしたりすることができないのは、実に濟まなくしかも心残りなことです。川島君夫妻は今偁山の麓にいて、本来ならあなたに紹介してよいのですが、あなたがそこに行く頃には彼らはおそらくもう故郷を離れていることでしょう。寒中、お体にお気をつけください。不尽。民国十五年一月十八日夜、北京にて。

※初出：1926年11月27日『語絲』第107期

死ぬ法

「人にはみな死あり」此の格言はたぶん確実であろう。なぜならわれわれは不死の人を見たことがないから。書物の上ではかつてそうした物、あるいは仙人と言ひ、あるいはストラルドブラグ (Struldbrug) ⁱ というものがいると言われたこともあるけれども、いずれも大した関係はない。だがわれわれはこの目で見たことがないし、北京学府の静坐の道友も又みんな布団を残して下山してしまい、凡人には飛昇を目撃する機会を与えようとしないから、本稿が印刷に付される時までには本人はついに暫く上述の格言を承認せざるをえず、死を生活の最後の一部とするのは、恋愛を中間の一部とするようなもので、——むろん、この両者が時には一箇所に並存することもあるが、これはもとよりかの原則を打破することはできない。仮にわれわれが死後にもまだ恋愛生活があることを信じないとしても。要するに、死は各人にみな分け前があるからには、その法も語ることができようというものだ。

世間の死に方の統計を取ると、全部で二大類あり、一を「寿正寝に終わる〔大往生〕」と言ひ、二を「非命に死す」と言う。往生の中は又三つに分けることができる。一は老衰、つまり俗にいう灯尽きて油乾くで、大抵みな「おめでた」である。というのはこの終わり方は八九十歳のおじいさんおばあさんでないとなれないし、彼らはその時必ずすでに四世同堂で、一家は一二百人に上る大々小々男々女々で膨れ上がり、実際いささか住みにくいから、彼の欠落は自ずととも歓送されるものである。二は突然死で、ある機関に故障が発生し、突然進行が止まる、ちょうど時計のゼンマイが切れたように、実は頭のとっぺんが陥没したのとそれほど違いはないのだが、これは内科に属するため、外からは痕跡が見えない。それで 正寝^{せいしん}の部類に入るのである。三は病死である。とても穏やかなように聞こえるが、実際多くはかの「秒生」(Bacteria) 先生のいたずらで、様々な凶悪手段で、「蟻の命」を陥れるのである。早いのは一二日でまだ御慈悲であるが、あるものはまるで長期の拷問で、「東廠」ⁱⁱ など比喩物にならず、まことに残虐の極みである。まとめてみれば、一二はいずれもまだ大したことはないが、長寿は求めて僥倖で得られるものではないし、心臓麻痺を希ったところでこれ又仙人になろうという困難と変わりはない。大多数の人の運命はやっぱりただ病死ということになる。これをわたしの苦を避け樂を求めるといふ意向からすると実に大いなる逕庭がある。だからよい死に方を手に入れようとするなら、われわれは往生を諦めてこれを非命に死ぬことに求めるほかない。

非命のよいところはそれが突然であるということにある。十五分前には明らかにまだ生きていたのが、十五分後には伸びて死んでしまう。たとひ苦痛があつたとしても（わたしはあまり信じないが）ただの十五分だ。これはそれにしかないよいところである。だがこれも一概には言えない。十字架はローマが奴隷を処刑する刑具で、十字架に釘付けにし、生きながら餓死かまたは昏倒死させ、おそらく何日かは生きながらえる。火あぶりは中世の護教者が異端に対処したもので、その時炙られて堪え難いばかりか、後にもバラバラになった体が残りに、あまりよくない。車刃に斤〔斬首〕はもともととてもさっぱりしていて、外国貴族の特権で、中国の好漢の歓迎する所でもあるのだが、ポツンとある頭は、西瓜か、あるいは「文旦」のようで、ある友人が長沙

で見たところでは、あまり体裁が良くないようで、なぜというに人間の体としてあまりに型に外れているのだ。金を呑んだり苦汁を飲むのも、いずれもいささか女々しいところがあり、阿片を吸うのもあまりに名誉を損ねることになって、人から阿片中毒呼ばわりされる。たとい生前に「芙蓉城主と解けぬ縁を結んだ」ことがなくとも、砂を抱いて自ら沈むのは、先に屈大夫〔屈原〕があり、後には……があるが、すこぶる英雄の気があるものだ。ただおそらくあまり長く浸かっていると、魚やスッポンの親しむ所とならずとも、咳を治す薬の「胖大海」〔アオギリ科の樹木のタネで、乾燥したものが水分を吸うと海綿状に膨れ上がる〕のようになって、すこぶる風趣にかける。首吊りはとても気持ちが良いということだが、（注意：これはただ“ということだ”であって、真偽はどうかはわたしは保証しかねる）、有島武郎と波多野秋子はこうして死んだ。ある日本の文人は冗談半分に、みんな自殺しようとするならこの方法に限ると言ったことがある。しかしわたしからすればやはり大きな欠点がある。何かの本に首吊り幽霊がコックリさんになって詩を題したと云う。

「目は魚眼の如く四時開き、
身は懸旌の若く終日掛かる。」

（はっきり覚えていないので、待考。この二句は、実際あまり聡明でない、おそらく受からなかった秀才が作ったものだろう。）又イギリスでは昔盗賊を処刑したそうである。そいつを台に掛けて、風が吹いた時には骨がカラカラ鳴る、（こうした話はむろん全部は信用できない、というのは盗賊は皆鎖骨ではあり得ない、しかしながらこのようである「そうだ」から、わたしも無理に反対するのは具合が悪い）、いささかダンセニイ卿（Lord Dunsany）の小説の風味があるけれども、どうしても怪異に過ぎる——ちょっと度が過ぎていようである。あれこれ考えても皆あまりよろしくない。そこで最後に銃殺を思いついた。銃殺、これは現代文明の中では最も理想的な死に方ということになるだろう。それは実は丈八の蛇矛でずばっとひと挿しのようなものだが、もっと文明的である。つまりもっと便利だということで、張翼徳でなくても使え、しかも同様に広く多く使えるのだ！体には一つ穴が開くだけで、中の機関は少しも壊れない。タンポポの白い汁のような赤い水が流れたら、それでお終いである。なんと簡単だろう。簡単はすなわち安楽であり、これはどんな病気よりもずっとよい。三月十八日中法大学の学生胡錫爵君が執政府で殺され、学校で追悼会を開いた時、わたしは一副の対聯を送った。文に言う。

「なんたる世界、まだ愛国を講うのか？
此の如き死に法、仙に成るに抵得る！」

この一聯は実にわたしの衷心からの頌辞である。もし美中に足らざるありと言うなら、弾があまりに大きかったことで、皮肉をひと塊り剥ぎ取っていたのが、やや目に触ったことだ。もし鳥撃ちの鉄砂のようなものを発明できたら、撃ち抜かれても一本太い銅線のような跡しか残らず、そうなればもっと申し分がない。思うにこうした発明はたぶんそれほど難しくも費用も時間もかからないだろうから、成功した時には、酸っぱいミルクを飲んだメチニコフ（Metchnikoff）医師が言った人間の「死欲」もきつとすでに発達していようから、その時は本当に「これを合すれば双つながら美なり」と言うことができよう。

わたしがこの文章を書いたのは、あるいは少し正岡子規の俳文「死後」の暗示を受けたかもしれない。だがこの話と考えはすべてわたし自身のものである。又上文で述べたことはあるものは冗談であり、あるものはそうではないことを、併せて声明しておく。(民国十五年五月)

案ずるに、言う所の俳文「死後」はすでに張鳳舉先生によって訳され、『沈鐘』第6期に載った。民国十六年八月編校時に再記す。

※初出：1926年5月31日『語絲』第81期

ⁱ Struldbrug スウィフトの『ガリヴァー旅行記』に出る若さのない永遠の不死の民の名前。

ⁱⁱ 東廠 明の成祖によって置かれた宦官による特務機関。特に魏忠賢がこれを利用して反対派を弾圧したのが有名。

心中

三月四日の北京の新聞に日本人が西山旅館で情死した事件が載った。女は朝日軒の芸妓で名を来香と言ひ、男は山中商会の店員「一鵬」だと言うことである。こうした名前は聞いて少しおかしいので、さらに『国民新報』の英文部を調べて来香は梅香（Umeka）の誤り、これはいわゆる芸名で、本名は日向信子、十九歳、一鵬は伊藤伝三郎、二十五歳であることがわかった。情死の原因ははっきりしないが、死者の身分から見れば、たぶんお互いに好き合ったが様々な障碍から思い通りにゆかず、別れて生きるよりは相抱いて死んだほうが増したというので、こうなったのであろう。

こうした情死は中国では滅多にないが、日本ではごく普通で、佐々醒雪の『日本情史』ⁱ（日本文学における恋愛史論ということができ、中国の『情史』とは性質が違ふ。一九〇九年出版）は、南北朝（十四世紀）の『吉野拾遺』の中に里村主税家の若党と内侍の女とが身を寄せるところを失って、深い山に入って共に刃に伏して死んだと言う。六百年前にすでにそういうことがあったのである。「この男女が“此の世こそつたなからめ、後の世は久しう”と語らつたとあるのは、やがて元禄式情死の先蹤である。この南北朝から足利期（十五六世紀）は、かの二世の契といふ思想の漸く明かになつた時代で、近世に入つては、寛文（1661～72）前後のものに見える伊予の田舎唄にも、

闇の丸木橋さまとなら渡ろ、落ちて流れて後の世もともに、
と謡つてゐる。

驕華奢靡の間にも、なほ殺伐な蛮気を帯びて、思ひ切りのよい気象を尚んでゐた元禄期（1688～1703）には、二世の契といふ感念に伴うて、自ら悲惨なる情死者を出すべき傾向をもつてゐたのである。」

このような情死を日本では通称「心中」（Shinjiu）と言う。情死の事実は「古巳に之有り」で、南北朝にすでに様々な記載に見えているけれども、心中という名前は徳川時代の産物である。もともと心中という言葉の意味は字の通りで、衷情と言うようなもので、後に転じて心跡を示す行為、誓文を書くとか、刺青、断髪などを言うことになった。寛文前後は遊女の社会でも殺伐な心中が起き、爪を抜くとか、指を切るとか、あるいは腕や腿を刺し貫くとかした。さらにもう一步進むと自然と死をもつて相愛の心を表明することになった。西鶴はそれを「心中死」（Shinjiusi）と言ひ、近松の戯曲では心中という言葉はほとんど男女二人の情死に限られるようになった。この風気はずっと現在にまで流れて、心中は情死の代名詞になった。

（誓文を書くのは今では流行らなくなったようである。尾崎久弥の著『江戸軟派雑考』ⁱⁱでは古本の情書指南『袖中仮名文』によってサンプルを一篇ⁱⁱⁱ引いているので、今特にここに訳す。

誓い

今某人と夫婦たるを約す、眞実にして虚なし、たとい父母兄弟の如何に阻碍するとも、決して別に人に適くことあらじ。もし言うところ少しく虚偽あらば、まさに日本六十余州の神々の罰を受くべく、未来永劫地獄に落ちて、出る時あるなからん。須く至つて誓う者なり。年月日 女

名（血印） 某人（男名）

中国にはもと『青楼尺牘』などの書があったが、そこにこうした類のものがあるのかどうか知らない。）

近松は日本で最も偉大な古劇の作家であり、彼の著作はわたしから見れば中国の元曲よりもまだ趣味がある。彼が書いた世話浄瑠璃（社会劇）はほとんどが心中物であり、しかも彼はとてもそうした痴男痴女に同情的である。みすみす彼らが私情と義理の間に挟まれて、まるで罌にはまったネズミのように、どのみち抜けられず、ただ先延ばしにして苦痛を増すだけで、彼らの唯一の出口は「死」でしかない、そして彼らの死は何の英雄的でもあり得ず又超脱的でもない、彼らの「一蓮托生」の願望は実はとても幼稚でおかしいのだが、しかしわれわれはそれを笑えぬばかりか、全心込めて彼らの大願が成就し、本当に西方浄土に往生して、今生で終えられなかった縁を続けられるよう希うのである。これはもとよりわれわれ凡人の思想である。だが詩人も結局は凡人の代表に過ぎない。まして近松は民衆を慰藉し楽しませるのを事とする詩人である。彼が心中を詠嘆するのは当然の事で、近松の浄瑠璃が盛行して以後民間の男女の心中事件が大幅に増えたということである。その勢力の大きさが想像できる。しかし本当に心中を鼓吹した芸術は、浄瑠璃の別の一派ということになる。すなわち新内節（Shinnai-bushi）である。新内節の心中に対する熱狂的な憧れはほとんど病的だと言うことができる。三七二十一に関わらずただ一死をもって帰宿とする。新吉原の遊女がこの遊行の新内派の哀歌を聞いてはしなくも多くの悲劇を引き起こしたので、政府は文化初年（十九世紀初）新内節が吉原に入ることを禁じ、ただ中元に一日だけ許可し、盂蘭盆の供養とし、そのまま明治維新になってようやく解禁された。新内節は一種の曲^{うた}で、かつ語りかつ歌う。翻訳はほとんど不可能だが、いま「藤蔓恋のしがらみ」の末尾数節^{くち}を摘訳して、心中した男女への回向とする。この篇は鶴賀新内の作で、藤屋喜之助と菱野屋の遊女早衣との末路を述べ、篇名は喜之助の屋号藤の字を敷衍してできている。おそらく一七七〇年ごろの作だという。（『江戸軟派雑考』による）

「世の中にわたしほど苦しい運命の人はない。五、六歳のころ二親に死に別れ、一人の兄に頼って、一日一日苦しい歳月を送ってきた。後になって二進も三進も行かなくなって、そのままここへ売られてこんな生業する羽目に。ややもすればやり手婆あに責められて、新造として相手に出、夜通し客にいびられて、やっとの事で涙に濡れた袖を易え、一人前となりたれば、あなたを見つけ我が一生の頼りとす。たとい荒れ野の果て、深山の奥でさえ、どんな貧苦もいとやせぬ、手づから飯炊きみんなに食わしよ。楽も恋なら、苦も恋よ、恋という字の意味は明らか、恋こそただ忍耐という事。——あまりに可愛くて、人は想い極まり愚痴になる、起請を見張る神々も見ようとはせず。どうせ添われぬ縁なれば、いっそ一緒に殺してください。ここまで言うと、袖は早涙の湖、男も涙をたたえた顔を挙げ、早衣に一声、もともと人は風前の灯、この世は夢の宿、願いはただ一つ、未来は蓮華の座を共にせんことを。このことを聞くや、早衣は思わず喜びの涙をこぼす。草葉の陰の父母よ、きっと喜んでくださるわ、命を共にした人を連れて会いにゆきましょう。どうかわたしを恨まずに、非命に斃れる罪科を許してくださいな。閻魔様が罰を下さるなら、どうかわたしのために謝ってくださいな。祐天様、お釈迦様わたしを見捨てになり

ますまい？お側に仕えて、朝な夕な、心を込めて茶湯香華をお供えし、この世の罪を消しましう。南無祐天様、釈迦如来様！どうぞわたしをお助け下さい。南無阿弥陀仏！」（祐天上人は享保時代——十八世紀初——の人、浄土宗中興の祖、江戸の人はとても崇敬したので、遊女はそれで彼と釈迦如来をごっちゃにしたのである。）

木下杢太郎（医学博士太田正雄の別号）は彼の詩集『食後の唄』の序で「かの卑俗で涙に満ちた江戸の平民芸術」に言及する。こうした浄瑠璃はまさにその一つなのだが、残念ながら訳文が拙くて、ただ意は述べられるが元の情趣を保存できない。二世の縁の思想は完全に輪廻を基としているから、唯物思想が起こった現代では、心中する男女はおそらくもう蓮華台の慰藉は持ち得ず、その寂寞を増すことは免れないだろう。しかし昔はやはりたくさんそういう人がいた。もちろん経済的圧迫からもあったろうが、一半は「雅歌」にいう「愛情は死の如く強し」からであったはずだ。中国人は生命の重さを知らないようだ。だから如何にして善くその生命を捨てるかも知らない。そして又何時何処でその生命を奪われても愛惜しない。まして死のように強いものがあることを知らない。だから情死というような事は中国では絶えて見つけることはできないのである。

心中を鼓吹した豊後の掾は情死をもって終わったという。ならばわたしもこうした事を少しは喜ぶだろうか？と尋ねる人があろう。「いや、いや。ちっとも。」 民国十五年三月六日。

三月七日の日本語『北京週報』（199）を見ると、記載がやや詳しく、それによると女は年十八、男は名を伊藤栄三郎と言ひ、死後は遺書に書かれた通り朝陽門外に合葬された。女にはその父に残した手紙があり、自ら薄命を嘆き、併せて諄々と父母にどんなに貧乏しようとももう妹を芸妓に売らないでと頼んであった。栄三郎は俗歌風の絶命詞一章を作っている。その詞に云う。

「交情いよいよ深ければ、この世はいよいよ狭く思われる。死んで花実が咲くものかとは云うものの、生きていたとてどうせ一緒になれはせぬ、何を惜しもう二つの命。」^v

『北京週報』の記者は巻頭語ですこぶる同情的な論調であるが、「北京村の紅一点」という記事では男女二人の会話を想像して、いささか什匿克（これは孤桐社主の cynic の訳語）の気味を免れず、死者に対して取るべき態度ではないようだ。中国人が情死を理解できないのは、大陸的あるいは唯物主義のせいだから、こうした言い方はあるいは正しいのかもしれない。日本人が中国に来ると、たぶんとても唯物主義の影響を受けるのだろう。だから彼らは時に奇怪に思ってしまうようだ。

※初出：1926年3月15日『語絲』第70期

ⁱ 佐々醒雪『日本情史』新潮社 明治42年12月初版 「近世」p.270.

ⁱⁱ 『江戸軟派雑考』尾崎久弥著 春陽堂 大正14年6月初版。主に「評釈藤蔓恋のしがらみ」による。

ⁱⁱⁱ 同書p.511. 「起請文の事 一そもじさまと夫婦の契約いたし候所実正也然る上は親兄弟たとへいかやうに申候共外に夫持申間敷候かやうに申事はすこしも偽御座候はば日本六十余州の神々の御罰をかふむり未来永永ならく地獄へ落入うかむせ有間敷候依而起請文如件 年号月日

女の名 血判 男の名」

^{iv} 同書 p. 495～500. 「わしほどいんぐわなものはなし。五つや六つでふたおやにしにわかれ、あにさんひとりをたよりにして。あさなゆうなのかんなんを。なきあかしたる月や日の。めぐみもつきてこのさとへ、うられてきたは身のいんぐわ。にしもひがしもしらばこそ、やりてにしかられ、めうだいのきやくしゆに夜すがらいびられて。なみだをしぼるそでとめて、おまへひとりをたよりぞや。たとへ野のすへやまのおく、どんなひんくもいとやせぬ、手づからわたしがままたいて。たのしむも恋。くるしむもこへ。こいといふ字がさすわいな。まことしんぼう一つぞや。かわゆうてかわゆうてすいになるほどぐちになる。きしやうをまもるやくそくのかみさんがたもきこへませぬ。とてもそわれぬならば、いつしよにころしてくださんせと。そではなみだのにわたずみ。おとこもなみだのかほをあげ、これはやぎぬ、人げんはのかぜのまへのともしびのごとく、この世はゆめのかりのやど、みらいはおなじれんげざと。おとこのことばにはやぎぬは。うれしなみだともろともに。くさばのしたでととさまやかかさまもさぞおうれしう御ざんせう。おつつけお目にかかるから、やいばにかけしわがつまを。かならずうらみてくださんすな。ひごふのしにのつみとがを。ゑんまさんがしかるなら、わびことをして下ださんせ。ゆうてんさんやしやかさんのよもや見すてはさんすまい、おそばへいんであさゆうのおちゃやこうはなをきをつけて。この世のつみをほどこさん。なむしやかによらひ。ゆうてんさま。たすけてたまへなむあみだぶつ。」

^v 『北京週報』199号 1926年3月7日 卷頭言「北京なる日本人の若き男女二人が、数日前山西〔西山の誤〕の旅館で、支那には珍しい情死をした。女は芸妓である。その父に宛てた遺書には、此世に於るわが身の不運を歎きつつ、せめて一人の妹だけは、如何なる貧苦の中にありとも売らるるものなどにはせぬやうくれぐれも頼みありと。同情するものは彼等の為に一掬の涙を濺ぎ、嘲るものはたわけもの奴等がといふ。かかる事件を見るにつけても、間違つた唯心論の人心に浸潤久しくして、此世を毒するの罪の甚深なるに憤りを為さねばならぬ。弱きもの、貧しきもの、虐げらるるもの、彼等は其生ける天地に何らの光明与へられずして、更に死の永久の暗黒裡に、未来の幻影に欺かれ、蛇に吞まるる蛙の如く吸はれ行く。弱き者の滅ぶるは已むなきの則といふも、かくて心のやさしきものも亦堪へず、適者生存実は忍者生存となる。（以下略）」

「伊藤の辞世」「深くなるほど浮世がせまい死んで花実が咲かぬといへど生きてそわれぬ、何のをしかる二人が命」

「朝日軒」とは当の『北京週報』に「会席御料理 北京崇文門河沿頭」と広告を出している。

三月十八日の死者について

一

わたしは極めて熱狂に欠けた人間であるが、同時にすこぶる冷静にも欠けている。これはたぶん神経衰弱のせいだろうが、一度何か刺激に遇うと、心が乱れて、思考できなくなるしさらに物を書くなど言うまでもない。三月十八日午後わたしは燕大に授業に行った。第四院に着いて外交の請願によって授業は休みだと知ったので、家に帰ろうとしたら、許家鵬君が負傷して逃げ帰ってきたのに出くわし、彼が執政府の衛兵が民衆を銃撃する模様を報告するのを聞いた。これ以後、毎日記事や談話から聞いた悲惨な事実が日を迫うごとに増えていき、心に積もってもう抜け出せず、まるで何もできなくなった。今もう惨殺から五日目になり、みんなが段祺瑞、賈德耀を糾弾し、国民軍に期待する話はすでに言い尽くし、しかもすでに全てが無用のように思われる。このことは却ってわたしの心を落ち着かせ、殺された五十何人かはすべて無駄死にであり、交渉の結果は上海事件よりもずっと悪いであろうことを認めさせた。これはいわゆる国家主義が流行する時代には当然のことかもしれない。だからわたしは徹底的に取り調べ処罰せよなどというたわ言を放り出して、単独で今回の難に遭った死者についていくらか感じたことを言うことができる。——首都での大虐殺の後五日目、このように心静かに話ができることは、わたしの冷静さもまだ少しは残っていることがわかる。

二

我々の死者に対する感想は自ずと第一に哀悼である。どんな死者にであれわれわれはすべてそうすべきであるが、ましてや無辜で殺された青年男女である。ある者は我々が教えたことのある学生である。わたしの哀感は普通次の三点からくる。よく識っているかどうかはまだその次である。すなわち一は死者の苦痛と恐怖であり、二は未完成の生活の破壊であり、三は遺族の哀痛と損失である。今回の死者はこの三点でいずれも極めて重いと言える。だからわれわれの哀悼の意も特に普通の弔問よりも重い。第二は哀惜である。およそ青年の夭折は惜しまれないものはないが、今回は特に惜しまれる。なぜなら病死はまだ自然の成り行きであるが現在の虐殺は人間の行為である。人間の行為が青春を破壊することは必ずしも最も歎惜すべきことではない。ただ主体が自ら放棄することを願ひ、そしてそれによってさらに大きな物を求められさえすれば、恋愛であろうが自由であろうがそれは構わない。数日前茶話の「心中」の中でわたしは、「中国人は生命の重さを知らないようだ、だからいかにして善く生命を捨てるかも知らないし、又何時何処でその命を奪われても愛惜しない」と述べた。今回の数十の青年は有用貴重な生命をもって自主的にではなくくだらない請願の中で破壊された。これはあまりにも残念な事だと思う。わたしはしょっちゅうひとり心の中で夢想する。「もしも彼らが死ななかつたら……」と。実際何度も奇跡への期待と要求を感じた。だが不幸にしてこの明瞭な世界では奇跡は起こり得ないということわれわれはとっくに知っている。——わたしは奇跡を信じることのできない不幸を深切に感じた

のであった。

三

今度の執政府の大虐殺で、不幸にして女師大の学生が二人その場で殺された。楊さんの遺体は病院にあったから、運んで帰ったが、劉和珍さんは執政府の入り口で外に逃げようとして衛兵に後ろから銃で撃ち殺された。だから遺体は執政府にある。ところが執政府はなぜだかその二三十の自らの手で撃ち殺した死体を宝物のようにして、やすやすと人に手渡さない。女師大の教職員が九牛二虎の力を振り絞って、十九日の晩になってやっとの事で学校に運び帰り、大講堂に安置した。二日目の午前十時納棺するので、わたしも行って見た。本当に幸運なことにわたしは傷痕や血衣を見なかった。ただ経帷子に包まれた二人を見ただけだった。ただその他に顔に薄いヴェールが被せてあり、かすかに顔貌を見ることができたが、ふたりとも安らかに莊嚴に眠っているようだった。劉さんはこの半年来宗帽胡同時代から教えた学生なので、顔はよく識っていた。楊さんは識らなかったが、彼女ら二人が並んで眠っているのを見て、思わず可哀想になった。まるでわたしの妹が、——いや、わたしの妹は生きていればもう四十である、まるでわたしの今の二人の娘の姉さんが死んだのを見たようである。彼女らには本当の姉さんはないのだけれども。棺を閉じる時、女子学生たちが声をあげて泣く中、わたしは突然空気が非常に重くなって、みんなの呼吸が少し苦しくなったように感じた。わたしは教職員の中の髪に白髪が混っている人がこの時には涙を流さんばかりにしているのを見た。彼の下顎はブルブル震えて堪えようとしているのだが不可能だった。……

これはわたしが昨日『京報副刊』に発表した文章の一節であるが、劉・楊二君の事についてはもう書きたくないので、この「新聞の文章」を書き写した。

四

二十五日女師大は追悼会を開き、わたしは間に合わせに輓聯を一つ作って送った。文に云う。
死ねば死に切り、二人に門に依る老母と、便り待つ家族親友があることを考えなければ。
生きていたとてどうだというのだ、幾たびも銃声耳を驚かし、弾雨は頭に降り注ぐのに。
殉難者全体の追悼式は二十三日にあった。わたしは夕方になって初めて知り、やはり一聯を作った。

赤化赤化と、学界の名流連中と新聞記者は人が死んでも誣告する。

哲^{ちだじよ}死白死だ、いわゆる革命政府と帝国主義は原はと言えば同じ物。

恥ずかしいことにわたしはどう転んでも「文字の国」の国民、文字でもって死者を記念するしかない。民国十五年三月十八日の五日後。

※初出：1926年3月29日『語絲』第72期

新中国の女性

三月十八日国務院の虐殺事件が起こってから、日本語の『北京週報』にすこぶる詳しい記述が載った。所によっては中国の御用新聞記者よりもまだ公平である。というのは彼らは群衆が「何丁かのピストル」を持っていたというのを信じていない。Stickを持った人がいたとは言っているけれども。彼らは皆すこぶる中国の女性の大胆さと落ち着きに敬服している。明観生は「恐るべき刹那」の附記の中で次のようなことを言っている。

「此騒ぎの中で一番感じたことは、支那の女学生の強いことである。凡べての示威運動には、女学生が先頭になるが、其行動は却々機敏大胆で、男学生も及ばない。此日も女学生は盛んに働いた。私の直ぐ前にも一人の女学生が居て、鉄砲に打たれたが其女学生は例の長い毛糸の襟巻きで流るる血潮をキュッと押へながら、健気な態度をして居たのはあの恐ろしい中でさへ私に感心させた。この分では支那は女によつて起るぞと思はせた位であつた。」ⁱ

『北京週報』の社長の藤原君も社説の中で言及しているが、同じような意見である。

「当日親しく其場に出会して、此実況を目睹した友人の談に據れば、最も感心したことは、女学生等の勇敢である。彼の恐ろしい悲劇の中にあつて、女学生達は或は死し、或は傷つき、男子さへも耐へぬ中に於て実に其立派な態度を失はなかつた。支那は女から起こる国ではあるまいかと思はれた程であると。此前、久しく支那から離れて二十年振りて来た支那学者の老先生は支那の若い婦人達の顔が、前清時代の其等に比して実に見違えた精気を放つて居るのに驚く、これでは支那は興隆するに定つてゐると語つた言葉と照合して、其処に確かに支那の機運の或物を示して居るではないかと思ふ。」ⁱⁱ

われわれは佩弦君の「執政府大屠殺記」を読んで、彼が次のように言うのを見る。

「わたしはほんとうに役立たずで、門を出ると、走りながら、ただぜいぜい息をするだけだった。後ろに二人の女学生がいたが、一人にはわたしは本当に感服した。彼女は笑みを浮かべながらその連れに言った、“彼らも中国人だわよ！”これはわたしを恥じさせた！」ⁱⁱⁱ

この事と楊徳羣さんが友人を助けようとして難に遭つた事実を合わせて見ると、われわれは日本の記者の感想は確かであつて、決して全部が異国趣味のロマンティックな感激から出たものではないと信じることができる。しかしこの現象も当然なのである。様々な方面から見て、女性の革命事業に対する覚悟と推進は必ず男性より早く、より熱烈で断乎としているはずである、なぜなら彼女たちがこれまで身に受けた圧迫もより大きいししかもより長いからである。ポーランド、ロシア及び朝鮮の革命史上女性が大きな位置を占めることは、みんな大抵知っている。中国は後進だけれども、自ずとひとりだけ違うわけにはいかない。わたしは決して男性を抹殺して、彼らは救国の責めを負う資格がないと考えようとは思わないが、彼らにあまり生気がなく、あまり落ち着きと堅忍さがないことは、とても否認することはできない。わたしはまた決して日本の記者のように女性の力がすなわち中国を救うとは考えないが、中国革命がもし成功するなら、女性の力は必ずやその大半を占めるであろうことを確信する。革命思想を持つ男性はたやすく母や妻に引き止められるが、革命思想を持つ女性は自分から救国できるだけでなく、革命家の妻や、

革命家の母になることができる。これが彼女たちの力のあるところである。

男女の思想恋の変化は生の選択ととても関係があるが、今はいずれも男性を主とする。将来もし女性が「風雅の盟主」（Elegantiae Arbitrator）になれば、両性の問題は強調できるばかりか、一切が良くなるだろう。（ストープス女史の主張もその中の一部分である。）今は他のことは措くとして、中国革命に関することだけを述べよう。われわれの盟主はどのような人間でなければならないか。これは断乎として、書齋に逃げ込んで『甲寅』を読んでいるような聡明なお嬢さんではなく、また必ずしも男装して従軍した木蘭のような人物でもない。わたしはここでふとポーランドの詩を思い出した。この詩はブランデス（Georg Brandes）が著した『十九世紀ポーランド文学論』^{iv}に載っていて、有名な復讐詩人ミキエヴィッチ（Adam Mickiewicz）が作ったもので、題を「ポーランドの母に」と言い、詩人の理想の国民の母を表したものである。われわれはしばらく彼がどのような言い方をしているか見てみよう。大意は次のよう。

「早く君の息子を冷たくて人気のない洞窟に連れて行き、葦の上で眠らせ、湿った汚い空気を呼吸させ、毒虫と一緒に暮させよ。そこで、彼はどのようにすれば自分の忿怒を潜ませ、自分の思想を測らせず、黙って自分の言葉を死なせ、卑屈に自分の姿を蝮のようにするかを学ぶだろう。われわれの救い主は子どもの頃、ナザレで遊び、十字架を持ったが、後になって彼はその上で世界を救った。ポーランドの母よ！もしわたしが君だったら、わたしは彼の未来の運命のおもちゃで彼を遊ばせよう。早く鎖をその手につけて、犯罪者の汚い小車を押すことに慣れさせ、首斬り役人の斧鉞をみても顔色を変えず、縛り首の縄をみても顔を赤くしないようにさせるのだ。なぜならば彼は決して昔の武士のようにエルサレムにゆき十字軍になり、彼の旗を征服された城の上に立てるのではないし、また三色旗の下の子兵士のように自由の田畑を耕して、己の鮮血で肥やすのでもないからだ。いや、無名のスパイが彼を告発すれば、彼は偽の誓いをした裁判官の前で彼自身を弁護しなければならぬだろう。彼の戦場は地下の牢獄であり、抗いがたい敵は彼の裁判官である。絞首の枯木がすなわち彼の墓標となり、何人かの女の涙は、まもなく乾くだろう。そして国民の夜の長話が、彼の死後の唯一の荣誉と記念である。」

これがポーランドの賢母である。しかし良妻はどうあるべきか？同じ詩人が『グラシーナ』（Gracyna）で言うところによれば、彼女は夫の命令に背くことができるし、生命・家族・領地を犠牲にして、少しも顧慮愛惜しない、ただ祖国の光栄を保ち、敵に損害を与えることさえできれば。ああ、ポーランドの復讐詩人たち、ミキエヴィッチとスロヴァッキ、君たちの炎のような情熱は永遠に不滅である、この世界にまだ圧迫と暴虐があるかぎりには。君たちの理想の女性はあるいは誠にいさか過激であるかもしれない。だがポーランドではおそらくこうでなければいけなかったのだろう。そしてこうでなければポーランドはやはり存在し中興に至ることはできなかつたかもしれない。中国の今の状況はポーランドより少しは良いようだ、（だがわたしも保証はできない、今のように「学風を整頓」して行けば、たちまちそういう所にゆくだろう。）というのはブランデスが『ポーランド印象記』第二巻^vに言うように、「政府は学校で女子にポーランド文を読むことを禁止し、ただ裁縫を教えることだけを許可する。だから彼女たちは石板の上にそれぞれ一つブラジャーの絵を描いて、警察の臨検を防ぎ、机に裁縫の材料を並べて、書籍は下に

置く」が、中国ではまだなんとか彼女たちに本を読ませているのだから。そのためわたしは中国の女性に対してまだ彼女らがポーランド式の良妻賢母になるよう希望するところまでは行っていないと思う。ただ彼女がわれわれを導き、われわれを刺激できるようになることを希望する。それは決してもっぱら報復することではなく、われわれに如何にして真つ当に愛し死ぬかを教えるのである。

わたしは中国の新しい婦人あるいは古い婦人の愛情が猛烈かそれとも冷淡なのかは知らない。だが中国の男子は大抵が恋愛と生死に対して大きな理解と修養を持っているとは思えず、女性の影響が薄弱無用なことがわかる。今現在の中国に生きる女性は大胆にして落ち着いた態度で自分の恋愛と死を処理するだけでなく、また同様の態度で導く——いや、いっそ男子を誘惑あるいは蠱惑して同じ道を行けと言おう、そして恋愛と死とを互いに完成させるのだ。これにはどのようにすべきかは、彼女たち自身が知っているだろう。われわれは言うことができない。わたしはこうした希望を表明することができるだけだ。琴を弾き絵を描き詩を吟じ刺繍をするお嬢さんたちは、もともとはよいのだろうが、だがそれはちょうど薄紅色の花瓶のように天下泰平の時代の装飾品であり、わたしは決してそれを叩き割ろうと思わないが、今の中国のような落ちぶれた家に不釣り合いなものである。だからわたしは称揚しようとは思わない。およそ二十年前、劉申叔先生がちょうど東京で『天義報』をやっていたとき、わたしは三首の偶成の詩を作って、彼に送って発表した。今でもまだ覚えているので、ここに転録して、“詩ありて証と為す”ということにしよう。

新生を求めんと欲するが為に、辛苦して此に奔走す、——
学び得たり羹湯を調えるを、帰来して新婦と作る。」
宛委の書を読まず、但だ鴛鴦の錦を織る、
錦を織りて長きこと一丈、春華此の中に尽く。」
門を出るに大願を懐く、事竟うるも一映〔声〕あげず、
欵欵として庸軌に墜ち、芳徽永く断絶す。

民国十五年大虐殺の月の末日、北京にて書して殺傷されし諸女士の記念となす。

※初出：1926年4月5日『語絲』第73期

i 『北京週報』1926年3月21日201号 明観生記事「恐ろしかった其刹那」。

ii 『北京週報』藤原鎌兄社説 『北京週報』201号巻頭言。また小島麗逸編『革命揺籃期の北京』（社会思想社1974年10月）p.201にも見える。

iii 佩弦「執政府大屠殺記」 『語絲』第72期1926年3月29日に掲載、佩弦は朱自清の筆名。記事は「自清」の署名で載った。

iv, v ブランデス『ポーランド印象記』Impressions of Poland

『十九世紀ポーランド文学論』は『ポーランド印象記』の一章The Romantic Literature of Poland in The Nineteenth Century(1886)として同書に収められる。「ポーランドの母に」は

p. 241~2 にみえる。また女生徒へのポーランド語教育の禁止は同書第二巻 The Polish Women, p. 55 に見える。

for him. This is the "note" of Mickiewicz's celebrated poem, *To the Polish Mother*: "Take thy son in time into a solitary cave, teach him to sleep on rushes, to breathe the damp and vitiated air, and to share his couch with poisonous vermin. There he will learn to make his wrath subterranean, his thought unfathomable, and quietly to poison his words, and give his being the humble aspect of the serpent. Our Redeemer, as a child, played in Nazareth with the cross on which He saved the world. O Polish mother! In thy place I would give to thy son the toys of his future to play with. Give him early chains on his hands, accustom

242

IMPRESSIONS OF POLAND

him to push the convict's dirty wheelbarrow, so that he shall not grow pale before the executioner's axe, nor blush at the sight of the halter. For he will not go on a crusade to Jerusalem, like the olden knights, and plant his banner in the conquered city, nor will he, like the soldier of the tri-colour, be able to plough the field of freedom and water it with his blood. No! an unknown spy will accuse him; he must defend himself before a perjured court; his battlefield will be a dungeon underground, and an all-powerful enemy his judge. The blasted wood of the gallows will be the monument on his grave; a few woman's tears, soon dried, and the long talks of his countrymen in the night-time, will be his sole honour and memorial after death."

ぶつかって怪我をする

わたしは以前ある計画を立てたことがある。全身用の鋼の鎧を作り、鎧にはみな棘をつけ、棘の長さは猛獣の最も長い牙よりさらに二寸長くする。この鎧を被れば、深山大沢を自在に遊行でき、野獣の侵害を恐れなくてよい。彼らが攻撃してくれば、ただいが栗かハリネズミのように縮こまって動かないだけで、彼らはどうしようもなく、わたしは手も動かさず、彼ら自身に傷を負わせて追っ払える。

仏経では蛇には幾種かの毒があり、最も酷いのは見毒で、それを見た人はたちどころに毒死すると言う。清初の周安士先生は『陰鷲文』に注して、孫叔敖が打ち殺した両頭の蛇は、たぶんこの見毒の蛇だったのだろうと言う。なぜなら孫叔敖が両頭の蛇を見たから死にそうになったと言っているからである。(しかし両頭の蛇はあるいは猫頭鷹のように、ただ凶兆の動物でしかなかったのかもしれない。)しかし彼はまた後になって、現在でも湖南にはまだこうした蛇はいるが、すでに完全に無毒になっているとも言う。

わたしは小さい頃、唐代叢書の『剣俠伝』を読んで、とても怖いと思った。剣俠はみな練達得道の人であるが、とても癖が悪く、ややもすると飛剣を使って百歩の外から人の頭を取ってくるのだ。さらに劍仙がいて、それはもっと酷く、彼の剣は空中を飛んで、一筋の白光のように、何十里の道程を追跡することができ、必ず血を見なければ収まらないのである。わたしはその頃心の中で剣俠には会いませぬようにと祈り、ちょっとした不注意で彼らのご機嫌を損ねることをひたすら恐れたのであった。

近日の新聞では教職員や学生が新華門外でぶつかって怪我をしたと言う*。みんなはなんともおかしい事よと言うが、わたしのようなロマン派の人間からすれば、少しも怪しむに足りない。現今の世界では、どんな事でもありうる。そのためにわたしは上に記した三つの事を連想し、ぶつかって怪我をするのは実に情理の中ではありうる事だと思った。わたしのロマン説を信じない人については、別に事実上の例証をあげてご覧いただく。

三四年前、浦口・下関間の小型の渡し船一隻が、江心に停泊中の中国の軍艦の舳先にぶち当たって、たちまちに沈没し、旅客は一人も亡くならなかったそうである。(たぶん乗船の時に点呼して数を報告してあって、調査ができる帳簿があったのだろう。)一二年経って、招商局の汽船が、また長江で当時の国務総理が乗っていた軍艦の舳先にぶつかり、すぐさま沈没して、若干の値打ちのない人間が死んだ。年月と両方の船名、死者の数、わたしはみな覚えていないが、ただ上海で追悼会が開かれた時、一副の輓聯に、「未だ必ずしも同舟みな敵国ならず、凶らざりき吾輩亦清流」とあったのを覚えている。

これによって、ぶつかって怪我をするのは実は中国ではよくある事であることがわかる。完全な責任については、当然怪我させられた方が負う。譬えば、わたしが有刺の鎧を被っていたとすれば、見毒の蛇であれ、劍仙であれ、触れにきたり、あるいは見たり、あるいはわたしの機嫌を損ねたりすれば、その時は彼らが負傷するが、どうしてわたしがよくないと言えよう。又譬えば火は暗闇を照らせ、飲食を煮ることができるが、時には吹かずに消えたり、又家を焼き人を傷つ

けたりもできる。子どもたちはそうしたことを知らず、火の側に手を伸ばして、火傷をする。これは当然子どもの過ちである。

聞くとところでは、今度ぶつかって怪我した理由は請願によるそうだ。わたしはこれ以上ぶつかられた諸君を責めるには忍びないが、どうしてもこの方法は間違っていると思う。請願の事は、ただ現在の立憲国の中にしかなく、そのほかの所では全て通用しない。例えばロシア、一九〇何年だったか、かつてこの為に軍警が冬宮の前で発砲の挙に出、ぶち当たったのはもっとひどかった。だが彼らはそれ以後もう請願はしなくなった。……わたしは中国の請願もこれからは止めにして、それぞれが努力するよう希望する。(民国十年六月、西山にて。)

※初出：1921年6月10日『晨报』第7版

*当時北洋政府は財政困難を理由に国立学校の教員達の給料を遅配欠配させていた。それに対して給料支給を要求する請願デモが起こり、政府のあった新華門外で警備の軍警と衝突し、多数の負傷者が出た。それを政府側は請願者達が自分たちでぶつかって怪我をしたのだと言った。

烈士を食う

この三字は決して音訳などではない。読んでみるといささか佶屈聱牙としているけれども、しかし字のままであって、つまり烈士を一切れ一切れ食っていくことである。生か煮えているかにお構いなく。

中国人はもともと食人族である。象徴的に言えば人を食う礼教がある。証拠を要する実験派に会えば、歴史の事実を見てもらうとよい。中でも最も際立つのが南宋の時道々人間の干物を食べながら江南の行在所に馳せ参じた山東の忠義の民である。だがこれはただ人を食って義民になったというだけで、食べたのはやはり凡愚の肉であったが、いまでは烈士にお鉢が回ってきて、前代未聞の口福でないとは言えない。

前清の時には暗殺を行なった革命党を捉えて、処刑した後その心臓はほとんど官兵が炒めて分けて食べてしまった。これは現在から見れば大いに烈士を食う気味がある。だがそのころでも普通の逆賊と見なされれば、国粋の皮に寝て肉を食う法が実行され、よって綱常を維持はしたが、決して妖魔が唐僧にしたように、十全大補〔強壮剤〕の特製品だと見なしたのではなかった。現今の烈士を食うようなことは、それが——且つまさにそれが烈士であることを知って食べるのであるから、これは歴来の食い方とは又截然と違うものである。

民国以来久しくなんの烈士も出なかったが、今回五卅——終に北京市民の杞天の憂に依えて、というのは陽暦五月中に二つの四月があるのは、まさしく庚子の予言の“二四が一五に加わる”時になって、ようやく何人かの烈士が上海に現れた。これらの烈士の遺骸は当然全て埋葬された。その目で出棺を見た人がいるのが証拠である。だがまたこれはおそらく全部人に食われてしまったのではないかと、疑う理由を持っている人もいる。この食べ方には二つの方法があるそうだ。一つは貪り食う、一つはちょっと食べる。貪り食うのはまるまる飲み込むのであって、その効能は昇官発財、牛羊繁殖、田地拡張である。こんなでかい福の享受者は一二の武士に過ぎないそうで、飲み込んだのは全体の七、八を占め、余った二人の烈士は大衆の味を知る者に供されて分けて食われた。それらちょっと食べた者は多くて腕か肘、少なければ指一本か爪一つに過ぎず、その利益もまたそれほどではなく、せいぜい五卅紗秋*がいくつか、五卅纏足靴が何足か多く売れるか、あるいは壁に何度か屋号が書かれて、ハエの頭ほどの名利が得られるだけのことだ。ああ、烈士が国に殉じるに、その体になんの思い残すことがあろうか。仮にも国民に利があるなら、挙げて以てこれを贈ることを惜しまないはずである。しからば国民のこの挙は烈士の心を得ている上に、またよく廃物を利用できて、全く非議すべきところはない。しかも潮流に順応して、食べ方を改良したのは、特に喜ばしい。西洋人がかつて中国人は食に凝った国民だと評したことがあるが、至って道理がある。わたしは自ら無能にして、指を染められないのを恥じるが、“烈士を食う”という言葉聞いてとても面白く、故にこの小文を書いて申し述べた次第である。 乙丑の大暑の日。

※初出：1925年8月3日『語絲』第38期

*紗秋 未詳、帽子の類には違いないが、どんなものか。纏足用の靴との対比だから、それなりなものには違いないが。

閑話四条

一

沈黙は全ての中で最も良い表示である。“我は愛す——我は愛す”と囁くのは恋愛の究極の成就ではなく、天よ天よと叫ぶのもまだ極大の悲哀を表現するに足りない。そういう時の真の表示は化石のような、死の静寂であるはずだ。奇跡が眼前に起これば、目にした者はただ沈黙し、身震いするだけだ。安全帽の下から鳩が飛び出そうが、あるいは死人が生き返ろうが。不可能な事とあるはずのない事が起こるのは共に同じような奇跡であり、同じような不思議である。譬えばある人間が人間を生きのまま呑み込めば、後で吐き出そうが出すまいが、観客はきっと目を剥いて舌がこわばり話もできないだろう。そのうち吐き出したなら、それは上等のトリックになり、驚嘆佩服に値する。もし吐き出さないなら、それならつまりただ腹を膨らませただけで、ちょうど煮て食うとか蒸して食うのと同じで、やはり言語道断で、なんの言うべきことがある。“人食いのことを調べまして、公理正義とは明らかに合わないところがあります、……”などという言い方はただバカにしてできるバカ話ではないだろうか。

三月十八日以来、北京には少なからぬ奇跡が起こった。結果は沈黙、沈黙、また沈黙である。これは正しい。何故ならばこれが唯一のしかるべき対処法であるからだ。

しかしこれは又別の意味をも表示することができる。一つは恐れであり、二つは賛成である。だがわれわれ順良な市民においては、これはどんな比例をなしているであろうか、それはなかなか言いにくい。

二

天下の奇事は誠に独つではないばかりかやはり二つある。最近新聞は日本の政府も思想取締りの令を下そうとしたが、ただ残念なことに学界の反対を恐れたために、結局まだ発表していないと報じた。中国はと言えば、学界は六国飯店などの地に隠居した。この点は結局独つにして偶なりがたしで、日本の決して及ぶところではない。

思想取締という四字は、まことに妙極まり、昏極まりまた趣極まる言い方である。ロシアのなんとかいう小説に田舎者がかつて、“野っ原に風を追って、鬼の尻尾を抜く！”と言ったのは、ちょうど適切な評語である。風を追うのは尻を追うようなもので、追いつけないだけだが、鬼の尻尾を抜くのはあまり妥当ではない。それは鬼の小さな尻尾が抜けないばかりか、万一僥倖にも抜けたとすれば、——抜けたら又どうだというのだ？鬼の尻尾の前にはまだ一匹鬼がいるのではないか。ならどうするのか？これはまるで“倒抜蛇”*のようなもので、抜けたら運が良いが、あるいは同時に又不運でもある。日本の政治家が歴史知識に欠けているのは、残念なことである。彼らが躊躇したのはまだ取るべきではあり、畢竟以前の白色ロシアの官憲に比べてずっと賢明ではあるけれども。

中国では、いささか違うようだ。これは豚の尻尾を抜くとか言いようがない。大糖房胡同で

いつも見られるように。

天下の奇事は結局独つしかなく二つはない。

（民国十五年五月）

三

ふだんはみんなが重罪だと認める強姦が、動乱の時にはそれほど珍しくはなくなるようで、伝聞、ニュースから、知事の公文書に至るまで、みな堂々と言及し、まるで天橋の茶客が喧嘩をしたようなごく普通の裁判沙汰でしかない。そうだ、これは乱世では仕方がないのだ。乱世の特徴が乱であるからは。俗語に“乱世の人は太平の犬にしかず”と言う。動乱の戦地内の婦人の運命はたぶん二つだろう、（逃げたのと避けたのとは自ずと除外する、）一つは強姦を恐れて自尽するもの、二つは強姦されても生きているもの。第一の種類は自ずと彼女を烈女烈婦に仕立て上げる人がいて、さまざまな榮譽を加え、少なくとも歌の一首ぐらいはある。第二種の人はいはこれから同治・光緒時代の“長毛嫂嫂”のように人の軽蔑するところとなるだろう。彼女たちも可哀想で且つ——敬うべきなのであるけれども。忍辱と苦しみはおそらく人類生存の上で一つの重要な原素なのだろう。ちょうど忍辱と苦しみを認めないことが別の一つの重要な原素であるように。われわれは、現存する人民の大半が彼女たちの後裔であることを思うと、いい加減なことを言いたがるそれら八代九代の孫どもに対してほんとうにそれほど賛同できないと思うのである。

ある古書に云う、歴来の伝説によると、何千年か前、一度都が平定された時、一人の逃亡兵が婦人を強姦し、しかも彼女に言った、他人に強姦されると許さんぞ、と。男性の道德の精義がすべてここにある。彼はあるいはいい加減なことを言う鼻祖であったかもしれない。——おお、強姦がどうして閑話の材料になるのか。新聞で節約の記述を読むと、一言二言言いたくなるようなのだが、この題目は実に難しい。少し節約して、筆を“止め”にせざるを得ない。

四

難民——これは現在の北京の名物の一つである。ほとんど城内のどこかへ行きさえすれば何処にでも見られる。わたしは北京に十年ぶらぶらしているが、（前清の時にも一度来たことがある）、こんな現象はやはり初めてである。難民の家がどうかは、目撃したことがないので、考えもつかないが、こんな人工の乞食のような身なりは見るだけで不愉快である。そして特にわたしを不愉快にさせるのは難民の婦人の脚である。彼女たちの脚は自ずと今までずっとそうであつて、決して難に遭ってから縛つたのでも、あるいは難を逃れるために特に小さくしたのでもない。しかしながらそれは実に恐ろしいほど小さいのだ。わたしは以前確かに神秘的な纏足を見たことがあり、ほとんど“脚は何処にあるのか”と訝がるほど小さかった。いつもそれを見て自分は結局野蛮民族だと感じて“女の天足を見るのが最も嬉しいのに”という慨嘆を漏らすのであつた。今そういう脚が難民の体に生えているのを見て、いよいよ憮然を感ずるのである。決して難民は小さい脚を持つ資格がないなどと言うのではない。ただどうしてだか纏足と難民との不思議

な関係を感じて、まるで纏足が難民の原因であると言えそうな感じがする。わたしも自分が彼女らの同族であることは解っているが、心の中で君たちの遭難は当然だ、可哀想に、君ら野蛮民族は、と思うのを禁じ得ないのである。体に刺青をし、模様を彫り、色を塗り、耳・鼻・唇に輪を付けた男女は、かの機関銃・迫撃砲、それに飛行機——ああ、それに飛行機まで持った文明人に虐殺されて、きわめて自然で当然ではないか。おお、どうかこの悪夢から覚めて、あの国粹の難民、国産の小さな脚を見ないで済ませたいものだ。

しかしこの願望はあまりにも贅沢で、神は必ずしも聴こうとはされないかもしれない。

(民国十五年六月)

※初出：1926年5月24日『語絲』第80期・5月31日『語絲』第81期・
6月7日『語絲』第82期・6月14日『語絲』第83期

*倒拔蛇 未詳。

鉄砲趣味

胡成才君が訳したブロークの『十二人』は近ごろ喜んで読んだ本である。本文の辺幅はもともと多くはないけれども。わたしはこの詩の中に少し大革命の気味を嗅ぎつけた、ほんの僅かだけだが、というのはわたしの感覚はこのように鈍、いや、まるで少し麻痺していて、文学について何の刺激も根っから感じないのである。しかし第十一節の一行はとともわたしを感動させた。その文に云う。

“彼らの鉄砲は……”

この五文字はまるで呪文のようにわたしの眼光を吸付け、わたしの心中に一つの欲望を起こさせた、何とかして一丁鉄砲を手に入れたいと、ちょうど可哀想な小さい“音楽士ヤンコ”がボロヴァイオリンを欲しがったと同じように。おお、鉄砲！なんと愛すべき名前だろう。たとい単なる名前にしても。

あまりわたしを知らない人は、よくわたしはトルストイヤン (Tolstoyan) だと思っているが、これは実はそれほどでもない。トルストイはむろんわたしも好きだが、まだ“ヤン”になるほどではない。しかも戦争についてという点になると、わたしの意見はもっと違う、というのはわたしは戦争を承認するからだ。わたしは決して戦争を提唱しないが、それが一種逃れられない事実であることを認めざるを得ない。ちょうど我々が死を認めるように。これがわたしが鉄砲に対して反感を抱かない、そしてなおいささか眷恋の情を抱いているわけである。しかし、鉄砲は好きだが、決して全部がその実用にあるのではない、わたしは実は鉄砲そのものが好きなので、なかなかよい玩具として見ることができるのだ。あの燐光のように青光りする銃身、ほんとうに日々向かい合って撫でさすっても飽きない。“天下太平”の時には、百戦錬磨の古い鉄砲を手に入れ、(ピストルの類は好きではない、) 書齋の壁にかけ、わたし自身が拓した永明の造像と並べ、わたしの鳳凰三年の磚と同じく珍重したいと思う。玩具としてだから、弾はなくとも構わないが、むろんあればなおよい。“天下太平”と言ったが、太平でなければ古い銃刀など買えないし、また壁にかけた玩具を見ながら長閑な日を過ごせるはずもないからである。しかしながらわたしの鉄砲に対する愛着は変わらない。わたしが女人と子どもを愛好するように。南京で兵隊をしていた頃、五年ほど鉄砲を弄ったことがあり、それがこの嗜好を育てた。兵隊というものがならざるべからざることがわかる。

(民国十五年九月)

※初出：1926年9月25日『語絲』第98期

二〇一九年九月三〇日発行 第一版

周作人文集翻訳叢刊
『澤瀉集』（澤瀉集）

訳者 中島長文©

発行所 雙楡書屋